

『思い出トランプ』の「家族」

——舞台から装置へ——

はじめに

『寺内貫太郎一家』をはじめとするドタバタが売りのホームドラマで描かれた「家族」は、出来事が起こる場としての「家族」であった。「家族」に発生した出来事が「家族」全体に波及し、その過程を経て「家族」全体がどうなったのかということを見せる、いわば「家族」そのものが舞台であった。成熟期の作品に至っては、崩壊しつつある「家族」が描かれ、『あ・うん』においては複雑化した人間関係を表す共同体を設定し、新たな試みがなされたが、「家族」全体がどうなるかという点にやはり焦点が置かれていた。それは「実践国文学」七四号掲載の拙論で述べた

とおりである。

山 口 み な み

一方、『思い出トランプ』では、「家族」は大がかりな舞台としてではなく、より個人をあぶり出すような装置のはたらきをしていることに気がつく。短編小説という性質上のことも考えなければならぬが、そこには多様な人間模様としての男女の姿が描かれ、「家族」は男女の姿や個人をあぶり出すように機能しているのである。「家族」の中にふとした瞬間に男女の姿や個人の部分が垣間見られることで、「家族」を形成している個人がより浮き彫りになる。言ってよければ、『思い出トランプ』において「家族」は個人を映し出す装置としての働きを強めているのである。本論文では具体的に「家族」が装置としてどのようなように行っているのかを、作品の分析を加えながら論じていく。

第一節 「家族」に隠した男女——「はめ殺し

窓」「三枚肉」——

「はめ殺し窓」の主人公である江口は、子どもの頃から母のタカに母親とは別な女としての艶めいた面があることをうすうす感じ取っていた。たとえばそれは、タカが給仕のトクさんという時にしばしば垣間見られた。「何をしているのか、トクさんは母と一緒に奥の座敷に入ってしまった、江口は茶の間にポツンと取り残されていた。」^{注1}幼少期に感じた母親とトクさんの関係への疑問は、次第に江口の中で確信へと変わる。やがて大人になった江口は、嫉妬に苦しんだ父親の二の舞になりたくなかったがために、タカとは正反対と思われた美津子と結婚した。そこには「この女はオレを裏切ることだけはないだろう」という打算があった。タカと正反対な美津子にはそのような芽はないと、江口は信じて疑わなかった。やがて生まれた娘の律子がタカに似ていたことから、江口は「隔世遺伝」の可能性を恐れ、律子に見えるその芽を摘もうとした。

隔世遺伝というのは本当らしい。／色が白く肥り肉のところも、すぐ水を欲しがり汗っかきなどころも、タカにそっくりだった。／あれは律子が三つのとき

だったろうか。／湯上りの江口が茶の間に入ってゆくと、律子がテレビに顔をくっつけている。／「そんなもの、なめるんじゃない」／言いかけてドキンとした。／律子は画面にうつった男の俳優にキスをしていたのだ。／気がついたら、律子は畳に転がり激しい泣き声を立てていた。驚いて止めに入った美津子を突き飛ばして、江口はもう二つ三つ殴りつけた。

娘を殴りつけるという激しい行為に江口を駆り立てたのは、幼少期に垣間見たタカの女の面が重なったからである。たった三つの娘にタカと同じような女の部分が合ったことが許せなかったのだ。江口は「家族」に他の面がと考えると、またそれを認めたくもなかった。しかし律子が不意にタカの、いわば恥を思い出させた。普段考えることのない「家族」の性の部分と、それにまつわる不安を描き出している。律子は成長し、ますますタカの面影を感じさせるようになる。が、律子が結婚したことで江口は一応安心し胸をなでおろした。それにもかかわらず、律子が実家に戻ってきた。前触れのない帰宅の理由を言わない美津子と律子と前にも、もしや母と同じように夫を裏切る過ちを犯したのではないかという不安がよぎる。ところが美津子が突然苦しみだし、かかりつけの医師に往診を頼むこととなって事態は

一変する。美津子が「若先生」と呼ぶその医師は、何度も往診に訪れているというふうな足さばきで美津子のいる座敷に駆けつけた。

診察で胸をひろげている間は、江口も律子も隣の茶の間で坐っていた。痛みの説明をする美津子の声音に、江口は今まで聞いたことのない湿りと甘さを感じた。

「若先生」が何度も往診に訪れていたことさえ江口は知らない。主治医とはいえ、甘えた様子で胸をひろげる妻。やりとりを夫である自分が襖を隔てたところで聞いていることへの違和感。襖を一枚隔てた向こうに、江口の知らなかった美津子がいるのである。妻の美津子が艶めいた女の部分を持っていたという当然の事実には、江口はこのときはじめて直面したのである。江口が美津子に抱いていた絶対的な安心は、他人の介入によって脆くも崩れている。安定した舞台としての「家族」はもはやここにはない。むしろ「家族」は、美津子の女の部分を映し出す装置の役を果たしている。「家族」は磨硝子のように、本来映るべき男女の姿や個人の姿を曖昧に包んでいたが、一人の他者の介入によって、曖昧にばかされていた部分が露わにされたのである。

さらに、美津子だけでなく、タカの隔世遺伝を疑っていた娘の律子にも江口は裏切られた。律子が帰ってきた原因は実は夫の浮気であったと知った江口は「ふ、ふと湯玉が上ってくるように」笑いがとまらなかつた。笑い事ではないと口をとがらせた律子の横顔は「タカよりも母親の美津子に似ていた」のであった。美津子と主治医のやりとりにあっけにとられた江口は、律子の一言で自分の考えの見当はずれだったことに気づかされた。湯玉のように上ってくる笑いは、自分は一体何を見てきたのだろうという自嘲の笑いである。タカの姿が妻の美津子に重なったと同時に、タカの行動にいつもやきもきしていた父の姿が、実は自分の中にも存在するというカラクリが明らかになった。江口は、自身が父の遺伝子をしっかりと受け継いでいたことに気づかされた。あらかじめ伏線を張っているとすれば、それは律子の行動に対してやきもきしていた江口の姿である。「隔世遺伝」を目覚めさせぬように躍起になっていた江口の姿は父と重なっている。

江口が父親の二の舞になるまいと必死で築いてきた家庭には、些細だが確かなほころびがあった。それは「父親と同じように、自分もタカに惚れていたことに気がついた」という形で明らかになった。ただ、まだそう大したほころびではない。自分の誤った思い込みに気づいた以上、素直

にそれは認めるべきだ。むしろ、そしてそれ以上ほころびをとりつくるのではなく、「二階のはめ殺し窓に目かくしをする代わりに、とりあえず古くなったあの表札をはずして、下手でもいいから自分の字で書き直したものを掛けることにしよう」と受け止める。表札を掛けなおすという行為には自戒がこめられているのである。

こうして、他者が「家族」の中に介入してくることでまったく予期せぬ展開が与えられた。いわば他者がスイッチのような役割を果たし、「家族」という装置を動かすのである。

同じような構造は「三枚肉」にも見ることができ。

「三枚肉」の場合の他者とは主人公半沢の部下の波津子であり、友人の多門である。ここでは半沢と妻幹子が「家族」として暮らす、そこに二つの物語が存在している。その一つは半沢と職場の部下波津子を中心にした物語である。冒頭から中盤にかけては二人の関係が中心で、妻の幹子に悟られぬように平静を装う半沢の不安が描かれる。魔が差したとはいえ、部下である波津子と二度関係を持った半沢の後ろめたさが物語を動かす原動力となる。波津子と関係を持ったことを幹子に悟られまいと用心するのは幹子に対する後ろめたさのためであり、それが発覚すれば夫婦「家族」にとつての危機になりうるからである。実際に

は半沢と波津子の関係は入り口にとどまったのだが、重要なのは波津子という結婚前の女性に半沢が秘密を秘めさせたということである。半沢は夜中に手洗いから寝室へ戻る途中、飾ってある雛人形を見て「安いおひな様^{注2}」のような顔をした波津子を思いだしていた。

三人官女の右端は特に似ているような気がした。緋の袴を脱がせてみたいという衝動に駆られ、いい年をして、と自分を笑いながらベッドに戻った。(中略)隣に眠る幹子の、道具立ての大きい顔をうとましく思った。

半沢の中で波津子と幹子が対照的であるように、半沢は波津子に、幹子に対しては抱かない気持ちを感じ取っていた。波津子が半沢の男である部分を刺激したことは言うまでもない。しかしここで半沢が抱いているのはもはや波津子への愛情ではなく、後ろめたさである。そして、波津子の結婚式に気が進まないながらも夫婦そろって出かけ、幹子がまったく気づいていないことに安心する、というあたりまでが半沢と波津子の物語である。

結婚式を終えて帰宅すると、友人の多門が家に入りこんでいた、というのがもう一つの物語の始まりである。多

門が介入することで、記憶が二十五年ほど前にさかのぼり、三人の過去を振り返るといふ自然な流れが発生する。当時、半沢と幹子は半沢の母親から結婚を反対され、結核で療養中だった多門に度々励まされた。幹子は一人で多門を見舞うこともあった。多門が昔を思い出して語る。半沢と幹子が結婚した後、多門は八方ふさがりな状況から自殺を思い立つが、半沢から借りていた本があることを思い出して踏みとどまった。

多門が話し終えたところで、幹子が立ち上がって窓を開け、均衡を破る。その窓を開ける幹子の動作が、半沢に昔多門が窓から本を返しに来たときの記憶をよみがえらせる。あたかも点と点がつながるように、今まで見過ごしていた小さな疑問が二十五年を隔てて結びつき、明らかになる。

あるとき、白いスカートのうしろに、緑色のしみがついているのを見つけた。／「芝生に坐って、おしゃべりしてたら染まってしまったの」と言ったが、坐るだけであんなに青く染まるものだろうか。そのとき持っていた牛皮のハンドバッグの把手がとれて、素人らしいやり方でつけてあったのに目を走らせると、／「友達うちのシエパードがふざけて引っぱったのよ」／笑いながら説明をしたが、シエパードは多門

だったのではないか。夜、療養所の病室を脱け出して、林のなかで逢い引きする患者がいるというはなしを聞いたせいなのか。／多門が本を返しにきたのは、そのすぐあとだったような気がする。

それは多門が訪れなければ決して結びあわされることのない記憶であった。多門の介入がいくつかの不自然な状況を半沢に思い出させた。半沢が幹子に波津子との関係を隠したように、幹子もまた多門との関係を隠して生きてきたのではなかったか、という構図がここで示される。幹子は二十五年間も半沢に対して秘密を隠しとおしたのかもしれないということである。また、多門の介入が、半沢に自分の知らなかった幹子の一面を教えたということである。幹子と多門の物語は「三枚肉」の核心にあたる。「はめ殺し窓」でそうだったように、「三枚肉」では多門という他者が介入することで「家族」は個人をあぶり出す装置として働いてゆくのである。

幹子と多門が昔自分の知らないところで関係を持っていたても、おそらく今更夫婦の間に何があるというわけではないだろう。しかし二人の関係への疑問を半沢は胸に秘め続けなければならず、この先見る日常の景色は、当然今までは違うものにならないといけないのである。

「子供を買いにやったら、間違えて三枚肉を買って来てしまったんですよ。お口に合わないかも知れないけど」／三枚肉というのは、肋のところ、肉と脂肪が三段ほどに層になったところである。安いところだというが、時間をかけて煮込んだせいかやわらかく味もいい。／幹子も多門も、大きい肉にとりついて、口を動かしている。いつもより紅の濃い幹子の唇は脂でぬめぬめと光り、そこだけ別のいきもののように、肉をくわえ、脂を口の奥へ送り込んでゆく。／生気がないと思っていた多門も、光りのせいか口の中は生の肉のように赤く見える。

この生々しい描写は、半沢に眠っていた記憶が結びついて見えたものである。肉の脂の描写はそのまま男女の本質へとつながっていく。それは通り一遍の倫理などで簡単に片付ける事のできない人間の本性に関わるものかもしれない。「家族」はもはやそういうったものを超越しているという意識が、他者の介入により一変して崩れてしまう。

なにもないおだやかな、黙々と草を食むような毎日の暮らしが、振りかえれば、したたかな肉と脂の層になつてゆく。肩も胸も腰も薄い波津子も、あと二十年

たてば、幹子になる。幹子がなにも言わないように、波津子もなにもしゃべらず年をとってゆくに違いない。

秘密を持っていたのは半沢ばかりでなく、幹子も多門との関係を話すことなく半沢と結婚した。ここでようやく、幹子と波津子の類似性に気がつく。当時の幹子は、半沢との関係を隠してしたたかに結婚したあの波津子と同じであった。同時に幹子にはないと思っていた女の部分を、半沢はこのとき見つけるのである。肉と脂の層は、自分だけではなく相手にも存在しているのである。

「はめ殺し窓」の場合も、「三枚肉」の場合も、事の真相はわからない。若先生と美津子の中に、本当にそれ以上のことがあったのかどうかという事も、幹子と多門が関係を持っていたのかどうか半沢の記憶でしか辿ることはできない。加えて多門が今度は何を返しに来たのかも、はっきりしたことはわからない。江口や半沢に確信めいたものがあるが、確かなのかどうか知る術はない。それは江口や半沢からの視点でしか描かれないためであり、彼らと同じもどかしさを読み手に与える。だが、女である部分や男である部分は「家族」において存在しないものではなく、単に隠れているだけなのだという事、それが作品を通して明らかとなっている。他者を介入させることによって、「家

族」は装置として動き出し、生活を共にする過程で押しやられていた男女の姿を映すのである。

第二節 個人の帰着の場としての「家族」

「だから坂」

「家族」を形成している個人が、「家族」以外の人間と過ごす日常を描いたのが「だから坂」である。しかし背後には「家族」の存在がある。二節では二重生活を送る男の心の機微を、「家族」を装置としていかに見せたかを論じてみる。

主人公庄治は中小企業の社長である。肩書きと本来の自分との間にずれを感じ、安らげない日々を送る。あるとき庄治の会社にトミ子が面接を受けに来た。体が大きいだけの、とりわけ取り柄のないトミ子のことを気に入った庄治は、トミ子をマンションに囲い二重生活を始める。庄治は、トミ子にパーマをかけることや化粧をすることを禁じた。トミ子は「言われなければなにもしないが、言われただけのこととする女」^{注3}であり、諭えるならば、触らなければひとりで動くことのないピンポン球であった。そんなトミ子も、隣人との付き合いの中で次第に人並みの女へと変貌していき、庄治はマンションから足が遠のいていく、という物語である。

庄治は社長でありながら、タクシーのメーターが上がるのを気にする性分であった。目的地が近くなればタクシーを停めさせ、鼠のようにせかせか歩く。そんなところから鼠というあだ名がついた。人前で見栄を張りながら、タクシーのメーターを気にする庄治の姿は、人柄を象徴的に表した姿であるともいえるだろう。だが、トミ子のいるマンションへ通うときは、せかせか歩く鼠とは違う別な面がある。

いつもはせかせか歩く庄治だが、トミ子の部屋へゆくときだけは別だった。タクシーを降りると、角の煙草屋で煙草をひとつ買う。それからゆつくりと坂を登るのである。／中略／マンションに女を囲っている。マンションといったところで六畳、四畳半の中古だし、女も大威張りで御座に出せる代物ではないが、そういう身分になれた、というだけでも弾むものがあつた。男の花道という言葉がちらちらした。花道は、ゆつくりと歩いたほうがいい。

「マンションに女を囲」うという行為そのものに、庄治は充実感を覚える。このときだけは、せかせかと鼠のように歩くことから解放されている。たとえ「大威張りで御座

に出せる代物ではな」くても、外に女を囲うことの充実感が庄治を満たしている。それはトミ子への愛情というより、自分自身への愛情である。「そういう身分になれた」ことに對する感慨を、坂をゆっくり歩くことで表すものである。またこの坂は現実から一時的に離れる道でもあった。しかし同時に、ここには自分の居場所を求める男の切実さも感じられる。社長という肩書きを持つ庄治が、「家族」の外側に求めたものは、「家族」にも煙たがられるような、平凡な自分を受け入れてくれる存在であった。

ピーターエーだのダンスパーティーと発音すると、馬鹿にした顔をする息子や娘もいなかった。庄治は電気通信学校卒の叩き上げである。／お茶だ料理だと稽古事に血道を上げ、そっちで知り合った友達から電話がかかると、気取った調子で長電話している女房の声も聞かなくて済む。

庄治の「家族」の描写はこの部分だけだが、「家族」の像を捉えるには十分である。些細なことが癪に障る「家族」の疎ましさを、家に帰っても好き勝手に振舞えない窮屈さ。そういった感情がこの短い「家族」の文章に集約されている。疎ましい「家族」の存在が庄治を個人の行動へと

走らせ、隠れた人間性を映し出す装置となっているのである。

庄治自身はエリートと呼ばれる人種では決してなく、気取ることにも不得手であった。だが中小企業といえども社長という肩書きを得、自分の身の丈に合わない気の張る生活を続けていくうちに、自分が周りとは一番釣り合わなくなっていくことに気がつく。そして「家族」も次第に庄治にとって疎ましい場所になっていったことが、「気が利かない」が「気の休まるどころ」のあるトミ子を囲うきっかけとなったのだ。内面がにじみ出たようなトミ子の容姿や受け答えなどから、庄治はトミ子ならそうした疎ましさとは無縁であると直感した。その直感はとりあえず間違っではいなかった。だが「気が利かない」が「気の休まるどころ」が取り柄であるという反面、「甘い」と保証されて買った西瓜が水っぽかったといつて、庄治から食べかけを取り上げ、坂の下の八百屋まで交渉に出かけ、新しいのを取り替えてきたりする」ように、トミ子には頑固なところや、意外なほど行動力があつたことにも注目しなければならぬ。やがて隣に住んでいるバーのママの梅沢と交流を持ち、トミ子は徐々に変貌してゆくのである。

トミ子には、隣り近所とはつきあうな、といつてあ

るのだが、隣りの梅沢とはガス湯沸器の使い方を教えてもらったりで口を大きくようになったらしい。／算盤が出来るといので、帳簿整理を頼まれたというのだが、庄治が、要るだけは渡してある筈だ、ということ、トミ子は、お金じゃないの、と言った。／「なににもすることがないから」／こういうとき、トミ子の白い大きな体は妙な威圧感があった。

庄治にしてみれば、トミ子の元へ行くことは現実の気の張る生活から逃れることであつて、隣人との付き合いや関わりはどうでもよかつた。一方そこで生活をしているトミ子は、庄治との関係も隣人との付き合いもすべて現実である。トミ子が庄治の居ない時に「なにもすることがない」と気がついた時、はじめて囲われている部屋の外に目を向け始めたことを読者に予感させるのである。今まで庄治の言うことを否定することなく受け入れてきたトミ子が、初めて反論めいたことを口にする。トミ子に圧倒されて、庄治はそれ以上の忠告を出来なかつたのである。トミ子は外見どおりの女だと思つてはいたが、「妙な威圧感」も外見どおりであつたことに気づかされた。だが、庄治は依然として「気の休まるどころ」のあるトミ子を求め続ける。

仕事と遊びの両方で十日ほど日本を離れていた庄治は、

予定を早く切り上げて帰国した。庄治は出先で出会つた女たちよりも、トミ子のいる「西陽のさし込む赤く灼けた畳の上で、裸で冷奴や枝豆が食べ」られることを渴望する。庄治のトミ子に対する思いは、居場所に対する執着であると言つてよい。「裸で冷奴や枝豆」を食べられる居場所があるとと思うからこそ、庄治は早く帰つてトミ子の元へ行きなかつたのだ。トミ子の元を訪れた時、トミ子は居留守を使つて玄関を開けなかつた。隣に住む梅沢が出てきて何かを言いかけたことで、庄治はトミ子に男がいると直感したが、それは外れた。しかし、実際には他に男がいることよりも、庄治にとつてもっと危惧すべき状況が扉の内側にあつた。それは居場所の喪失という危機である。部屋にいたのは男ではなく、整形してまぶたの腫れたトミ子であつた。

世話をしたのは、隣りのマダムだつた。／「どうして、俺に黙つてそういう真似をしたんだ」／庄治は、トミ子を小突いていた。／そのはずみか、置時計のうしろにでも置いてあつたのか、ピンポン玉が柵からふわりと泳ぎ出してきた。ピンポン玉は畳の上で二つ三つ小さく弾んでから、ゆっくりと部屋の隅に転がつてとまつた。

ひとりで動くはずのないピンポン玉が動いた描写は、もちろんトミ子と重なる。トミ子もまた、今まで庄治に言われなければ動くことはなかったが、梅沢という人物がきっかけとなり、庄治の手から離れて勝手に動き出したのである。勝手に動き出すということは、いつも気にかけることとなり「気の休まる」場所とは程遠くなるのである。

庄治が今まで見ていたトミ子の姿は、いわば庄治が都合よく作り上げたものであった。ただ鈍いようにでいて、実は頑固で行動力があり、トミ子もまた人並みの女の要素を持っていたということである。結局トミ子は庄治に対して謝らなかつた。トミ子は庄治が禁じた化粧をし、さらに十日ほどで梅沢と同じような目つきになってきた。徐々に口数が増え、変わりゆく自分に対する自信も滲み出ていた。庄治が気に入っていたトミ子ではなくなっていたのだ。安らげそうだと思つてトミ子をマンションに囲つたのに、まったく裏腹であつた。トミ子に表情と自信がついてゆけばゆくほど、おそらく庄治は戦意を失つていったに違いない。そして、庄治はようやく現実に戻ろうとするのである。もはやトミ子はおどおどと庄治に従うだけの女ではなくなつた。居場所を失つた庄治は今までの弾んだ気持ちとは逆に、疲れを感じるようになる。これまではマンションに続く坂を「男の花道」と思つて登つていたが、その気持ちも失せ

てタクシーを使うようになった。しかも運転手に回り道までさせている。トミ子を囲つていたあの弾むような生活があつた場所は、もはや自分の馴染んだ場所ではないと気がつく。また、トミ子の人並みの女であつたと分かつてしまひ魅力すら感じないのである。

だから坂は、自分でも気がつかないうちに爪先が先に降りてゆく。下から上つてゆくときの、馴染んだ家や庭ではない、はじめて見る表札や垣根である。トミ子はノックをしても出てこないかもしれない。この次は鼻を直し、頬を直し、だんだんと隣りのマダムそっくりになる。白くこんもりと盛り上がったずんとした体は、足首がくびれ、胴がくびれてくる。大きな鏡餅の上で、安らいでいたと思つていたが、気がついたら、鏡餅はテカテカした白い裸のマスカン人形になつてゐるのだ。

トミ子を囲つたマンションは帰るところではなく、通うところであつた。通う場所からは、結局帰らねばならない。その事実に向き合うのは、トミ子への熱が醒めたときである。トミ子には「家族」にはない安らぎがあると思ひ込んでいたが、それは半ば強制的にトミ子に強い要求であつ

た。「家族」ならばそのような要求が通るわけではない。共に生活をするということは、ある程度折り合いをつけることである。無理やり要求を通して庄治はトミ子の自我に直面し、がっかりしたと同時に、これ以上深みにはまるのを避けられたことに安堵する。

大した坂ではないと思っていたが、それでもこのあたりは高台になっているらしく、目の下に商店街がひろがってみえる。屋根もガラス窓も看板も、みな蜜柑色に輝いていた。夕焼けであった。／ちようど一年、この坂を上り下りしながら、上りは陽に背を向け、帰りは闇になっていた。言いわけを考えながら帰ることもあって、下の町を、夕焼けの町を見たことがなかった。／トミ子のマンションに寄らず、このままだらだらと坂を下り、下の煙草屋で煙草を買って、タクシーを拾ってうちへ帰ろうか。庄治は坂の途中で立ち止まり、指先でポケットの小銭を探した。

庄治にとって、所詮すべてを投げ打ってまで得たかった場所ではなく、安直に得た安らぎであった。そして事実上トミ子という居場所が失われたことで、皮肉にも蜜柑色に輝いている町の中に自分の帰るべき場所があったことに目

を向けるのである。だがトミ子のいるマンションへ寄ろうか、そのままタクシーで家に帰ろうか、庄治はまだ心の中で迷っている。「だから坂」と言うとおり、庄治がだからとトミ子との関係が続けることをも匂わせる。疎ましい「家族」の存在は、庄治という男の隠れた人間性を映し出す装置となった。しかし一方で、「家族」が個人の帰着の場であることがはっきりしてしまった。「家族」の存在があるからこそ、女をマンションに囲うという楽しみがあるのである。

「だから坂」は「家族」に帰着するより仕方ない個人の状況を見せ、現実と夢の狭間で揺れる人間の脆さを浮き彫りにしたのである。

第三節 遺伝的繋がりに対する恐れ

——「はめ殺し窓」・「だから坂」、
「マハッタン」・「ダウト」——

『思い出トランプ』に収められた作品の主人公たちは、自分がどういふ人間なのかを親の姿を通して気づく。向田が落とすところとして遺伝や血のつながりを利用した感があることは否めない。しかし、「家族」には逃れられないものが流れていることは確かである。三節では「家族」の遺伝的繋がり主人公の心理にどのような影響を与えてい

るのかを探っていく。

一節で取り上げた「はめ殺し窓」はまさに祖母から孫、親から子の遺伝にまつわる構造で冒頭から末尾まで作り込まれている。タカから律子への「隔世遺伝」という不安によって物語が進行してゆく。結局は、母親タカの行動にやきもきしていた父と同じ遺伝子を江口自身が受け継いでいたことに気づくといったものであった。「はめ殺し窓」は三世代に渡る血脈という二重三重の仕掛けがなされているのである。

二節で取り上げた「だらだら坂」には親から子への遺伝の描写があるが、それについてはあえて触れることを避けた。以下は庄治がトミ子を囲うマンションへ向かう途中、煙草屋で煙草を買うときに、店の奥の鏡に庄治の顔が映るという場面の一部である。

死んだ父親にそっくりである。／年をとると枯れて萎む血筋らしく、また一段と鼠に似てきた。

庄治は自分の顔が父親にそっくりなことに気づき、子供の頃、朝鮮の舞踊を父と見に行ったときのことをふと思いつく。父が崔承喜の姿で踊る踊り子を見て、激しく手をたたいていたことに庄治は驚いた。このときの父の横顔は

「始めて見る男の顔であった」と回想し、自分の中に父親と似た部分を認める。さらには「崔承喜も、ずどんとした白い大きな体をしていたような気がする」という結び方をし、庄治が求めた女と父が求めた女との共通性を示すことで、それが血筋であると読み取らせるものである。小さな偶然が重なって起こるこうした事象は、不自然なつながりをしているわけではないが多少強引な印象を与える。なぜなら父親と崔承喜の件は絶対的に必要なものではなく、「はめ殺し窓」に見られるような構造の緻密さは見られない。父親と庄治、崔承喜とトミ子がそれぞれ重なり、一応その類似性という根拠を示してみたものの、それがその後物語りに関わってくるわけでもない。だが、二つの作品に共通する点があるとすれば、江口にとっても庄治にとっても、父親と同じ血が通っていることは受け入れるしかない事実であるということである。自分がどう努力しようと、避けることは出来ないのだと受け止める。そこで自分の存在がどこに由来するのかを認識するのである。

一方「マンハッタン」と「ダウト」では主人公が遺伝に対してある種の恐れを抱いていることが見えてくる。

「マンハッタン」の主人公陸男は、失業中である。何をすることも無気力体質な陸男は、日々歯科医の妻杉子に小言を言われ続け、ついには離婚を切り出される。陸男は、自

分の中の小さな秩序を頑なに守ることで、杉子に言われる小言や現在失業中である事実から逃れ、なおもただららと無気力に過ごす。ある日、睦夫は毎日通う通りに「マンハッタン」というスナックが開店するのを知った。それからというものの「マンハッタン」という言葉が、まるで二十日鼠が車を廻すように睦男の頭の中を駆けめぐった。

睦男は偶然出会った「マンハッタン」に興味を持ちはじめた。「マンハッタン」という言葉に特別な思い入れはないが、「マンハッタン」が繰り返される間は「会社が潰れたことも、杉子に無気力体質ねと言われたことも、女房に逃げられたご主人というアパート連中の視線も考えなくて済んだ^{注1}」のである。睦男の中で「マンハッタン」は小さな秩序を守ることよりも効果的であった。睦男は「マンハッタン」の開店を待ちわび、自分の店でもないのに、工事中の「マンハッタン」に出入りする。帰り際、作業員が偶然落とした工具によって睦男は頭に軽い怪我を負い、大事をとって一晩入院することになる。怪我の功名で「マンハッタン」のママが自分を見舞いに訪れ、他の客よりも深くかわりを持つてることを睦男は期待するのである。「今までになく盛大に車を廻」す二十日鼠の描写は睦男の期待の大きさを表している。

睦男の関心は、「マンハッタン」と「マンハッタン」の

ママに集中している。無気力な睦男が、権利も権限もない「マンハッタン」に異常なほど執着し、会ったこともないママにまで大きな期待を寄せている。期待とは裏腹に、「マンハッタン」のママはポパイの恋人のオリーブ・オイルに似ており美人とは言い難かったが、睦男の思い入れはそのくらいで失せるものではない。

「マンハッタン」が開店し、思惑通り睦男は特別な客となった。「マンハッタン」を自分の店のように思い、熱心にも每晚通う。睦男は自分の持つものすべてを「マンハッタン」へ捧げるかのように「マンハッタン」に足りないものがあればなんでも寄付した。そうすることで「マンハッタン」にとって特別な客という立場を維持したのだ。そして睦男に献身的性質があることを、同じく常連の八田という男が嗅ぎつけるのである。

「なんか寂しいと思ったら壁面がひとつあいてるせいか」／気をつくたちとみえて、八田が言う。／「すみません。絵は高いのよ」／睦男は、また小走りにアパートへもどった。／居間にかけてあるリトグラフを抱えて、「マンハッタン」へもどり、黙って壁に懸けた。／釘を打ち、八田が、もうちょい右上などというのに合わせて、絵の懸け紐を調節する睦男の背中へマ

マが体をもたせかけてきた。／こうすると、オリ
ーブ・オイルも悪くない。睦男は、ママが彼と同じく胃
弱で無気力体質であることが気に入っていた。

「マンハッタン」のすべてが、睦男を生き生きとさせた。
「美しいが理の勝った」杉子と比べ、ママならばきつと居
心地がいいだろうと勝手に考えを巡らせるのである。誠心
誠意尽くしたつもり睦男は、ママが自分に好意を持って
くれていると思っていた。そのため妻に逃げられたことや
会社が潰れたことなどをママにさらけ出して勝負に出るの
である。そして「睦男のアパートへレコードを聞きにくる
約束を取りつけ」ることに成功する。睦男は閉店時間まで
待ったが、八田も帰らずにいたので仕方なく一人でアパー
トに帰った。すると誰かが「あたりをはばかりな遠
慮っぽい叩き方」でアパートのドアを叩くので、ママだと
思っただアを開けたが誰もいない。睦男は「ここまできた
ら、あとは時間の問題である。無気力体質同士、ゆっくり
ゆこう」とすでに安心しているのである。

睦男は自分が「マンハッタン」にとって一番大切な客で
あると信じきっていた。だから八田の存在もそれほど気に
ならなかったであろう。八田がいくら常連といっても自
分には敵うまいと思っていたのである。睦男は八田がどう

いう存在なのか、そしてママが結局は商人であるとい
うことを認識することはできなかったが、「マンハッタン」
が睦男に束の間ではあるが満ち足りた生活をもたらしたこ
とは確かである。一方、「マンハッタン」に寄付した絵の
ことで睦男は杉子に責められる。

弁償する、という睦男を、杉子はじつと見た。／
「どこへ持っていったんですか」／とがめている目は、
覚えがあった。二十年ほど前に、若い女をつくってう
ちを出ていった父に、母が向けていた視線である。／
父もよくうちのものを持ち出した。掛軸。能面。新型
のラジオ。

ここでようやく、睦男の父親や母親のことが語られる。
杉子の疑いの眼差しは、母が父に向けていたものと同じ
だった。睦男の中に父親の姿が垣間見られる瞬間である。
気がつけば、物のみならず自分自身も捧げ物のようになって
いるのである。だが、ここで睦男が気がついたのは、父
親と自分の類似性よりも、杉子が新しい男とうまくいって
いない様子であることであった。やり直そうと思えばやり
直せそうなものをあえて断ち、睦男は自分と同じく無気力
体質なママとの関係を選んだ。自分が「マンハッタン」や

ママへ捧げてきたことの大きさを考えると、もうあと少しで「マンハッタン」もママも手に入りそうに思えたからに他ならない。だが三月経っても、職探しもママとの関係もはっきりしなかった。ある月曜日に「マンハッタン」に行くくと、「マンハッタン」は夜逃げ同然に店を閉めていた。

このとき、陸男は、八田がママの亭主だったことを知った。「マンハッタン」は、八田の姓からとった名前だった。／「マンハッタン」「マンハッタン」／陸男のなかで、日がな一日車を廻していた二十日鼠は死んでしまった。

自分の店のような気がして何もかもを捧げてきた陸男は、「マンハッタン」は八田の店であったことを知るのである。結局「マンハッタン」もママも、自分のものにはならなかった。無気力体質の陸男が、杉子との結婚生活を捨て、「マンハッタン」にすべてを捧げるほどの熱を上げた。「マンハッタン」によって無気力から脱したと思えば、また元に戻るという、陸男という男の滑稽さが描かれている。しかし、滑稽なだけではない。陸男が入れ込んだ「マンハッタン」は突然なくなつた。陸男の生活には再びただ無気力だけが漂うのである。そして誰かが再びアパートのドアを

ノックする。ママが絵を返しに来たのかと思ひドアを開けると、そこにいたのは見馴れぬ老人であった。こうもり傘の直しはないかと尋ねられた陸男は断つてドアを閉めたが、老人の顔に見覚えがある事に気がつき、はつとする。陸男はようやく、自分の無気力な性質と、その一方ですべてを捧げてしまう異常な性質がどこから来たものなのかを悟るのである。

どこかで見た顔である。／（中略）——二十年前にうちを出た、父親ではないのか。／またノックしている。／聞いたことのある叩きかたである。／あたりをばばかる遠慮っぽい——いつかの、てっきりママと思っていたあのノックは、そうすると父だったのか。／女に捨てられたのか、金の無心か。／ドアを開けたら、入ってくる。入ったが最後、ソファに坐り、日がない一日テレビを見て、昼には固い焼きそばを食べ——／死んだ母親がよく言っていた。／「お前のすることはお父さんそっくりだよ」／ノックはまだ続いている。

この場面で個人が遺伝、あるいは生育した「家族」の境遇の繋がりから逃れられないことを気づかせる。背後にある「家族」の存在が、自分の持つ性質をあぶり出す装置と

なっているのである。ここであぶり出される個人は、受け継がれた個人ということになる。そのため睦男の性質を丁寧に描くことこそ、「マンハッタン」では重要であった。なぜならばそれによって睦男の父親の性質をも明らかにすることが可能だからである。睦男を訪ねて来ていたのは「マンハッタン」のママではなかった。期待から一転して、ある恐れに変わる。ドアを開けて、父親であることを確認してしまえば、自分の根底にあるものを受け容れることになる。そしてよぎるのは、亡くなった睦男の母が言っていた「お前のすることはお父さんそっくりだよ」という核心をついた一言である。なぜ睦男にとって受け容れ難いのか、おそらく、自分の意思とは関係ないところで自分の性質が定まっている事実を知ることになるからであろう。無気力体質で、そうかと思えば異常に執着すること、そのすべてが睦男と父親とを関連付けている。父と同じ過ちを、自分もまた繰り返しているのである。ドアをノックし続ける父親は、睦男に逃げ場のない恐ろしさを与える。すべてが似ている父と睦男が二人で生活することの奇妙さは、語りつくせない。だが父親を受け容れたとき、自分自身を本当に認めることになる。睦男はまだ、自分自身を受け容れられないのだ。

一種自分の努力ではどうにもならないものを目の前に、

あえて抗おうとする。先に取り上げた「はめ殺し窓」や「だから坂」ではそうした抵抗はほとんどない。だが、睦男が遺伝や血のつながりに抵抗したとしても、最終的には受け容れねばならない事実である。次に取り上げる「ダウト」でも遺伝や血のつながりに対する恐れを感じさせる要素がある。

「ダウト」の主人公塩沢は父親が死に向かっていることを悟り、父を看取るために妻と入れ替わりで病室に入る。だが、塩沢は父親の発する臭気から耐えられず病室を離れた。建前では父親の死を見取ってやらなければならぬことを当然としながらも、本音の部分では父親から発せられる耐え難い臭気から逃れたいと思っている。しかもそれは、父子の情ではこらえることのできない臭気であった。塩沢は父から「はらわたの匂い」を感じ取り、臭気と共に昇ってくるおぞましきにもどこかで気がついているようである。

父はどちらかといえば枯淡の人であった。／小学校の校長を停年でやめたあとも、教育畑一筋に歩いた。酒もつき合い程度にたしなんだが、度を過すというとはなかった。／「お父さんみたいに衿の汚れない男は、いないんじゃないかねえ」／父と正反対に、口実

があれば晩酌ぐらいたしなもうという母親がそういったことがある。(中略)／この人間のどこから、けだものじみた臭気が出てくるのか。人はこういっておぞましいものを吐き出さなくては死ねないものなのであるうか。^{注5}

衿の汚れない人物であっても、内面には正反対の部分を持ち合わせているのが人間である。ただそれを取り繕って、外側には現れないように用心しているにすぎない。それが、最期のこの瞬間に、臭気という形で表現される。もちろん、匂いが人間の内面や裏側を表すなど、そんなことはあるはずがない。塩沢が感じた「はらわたの匂い」は実際にはただの病人の臭気であったかもしれない。ただ、自分にも後ろめたい事実があることを秘めているために、おぞましい「はらわたの匂い」を感じ取り、無意識のうちに避けたいと思ったのだ。父が臨終の時を迎えそうなのは塩沢にも分かっていた。だが父の発する「はらわたの匂い」に耐えかね、夕刊を買いに行くことを自らの口実にして病室を出てしまった。病室に戻ると、父の息は既に絶えていた。

父の死を悲しむより女房や親戚に臨終に居合わせなかつたことをどうとりつくろつたものか、言いわけを

考えていた。／自分の嫌な匂いを嗅いだような気がして、塩沢は力いっぱいベルを押しした。押しながら、あの匂いが、嘘のようになくなっていることに気がついた。

塩沢にとって、臨終の瞬間に立ち会えなかつたことの後悔は、父親への申し訳なさではなく、女房や親戚に対しての後ろめたさと直結しているのである。そして、父の「はらわたの匂い」はいつのまにか消えている。しかしその匂いは後に自分の匂いだと気がつく。そのことに気づかせるのが塩沢の従兄弟の乃武夫である。塩沢は乃武夫が定職に就かずフラフラしているのが気に入らず、目の仇にしている。乃武夫がいると妻や娘をはじめ、親戚の女たちが浮き足立つことも、ふらふらしているくせに急に羽振りがよくなったりするところも、何もかもが気に入らないが、目の仇にする理由は他にあつた。塩沢がどんなに突っかかっても、乃武夫は顔色ひとつ変えずに飄々としており、何を考えているか分からない。それが塩沢の抱くある不安に繋がっているのである。その不安については後に明らかとなる。

父親の葬儀の喪主を務めることになつた塩沢は、自分が常務取締役という地位にいることも含めて、満足感を覚え

ている。父親の死に満足感を抱くことに多少の後ろめたさはあるものの、それでもこの葬儀は自分自身、その地位などを、自慢できる絶好の機会である。そんなところへ、乃武夫がやってくるのである。乃武夫は祭壇の前で丁寧に焼香し、涙をすすりながら死者を悼んだ。乃武夫のわざとらしい振る舞いが塩沢は気に入らない。乃武夫のように上手く立ち回することは、塩沢には到底真似のできないものであった。だが乃武夫の行動にいちいち腹立たしさを覚える。本当の理由は、実は塩沢自身のかつての行為によって。焼香に鯨岡元常務の未亡人が訪れ、未亡人はかつて元常務の葬儀を取りしきった塩沢に感謝も添えて帰るのであるが、それをきっかけとして塩沢の隠していた部分が徐々にあぶりだされる。

見送りに席を立ちかけた塩沢のうしろで、乃武夫が、
／「クジラオカ」／と呟いた。／なにかを反芻するよ
うな、意味のこもったいい方に聞こえた。／やっぱり、
あのととき、乃武夫はいたのだ。／あの声を聞かれてし
まった。／塩沢は、うしろから斬りつけられたような
気がした。

塩沢がなぜ乃武夫を目の仇にするのか、その理由はわざ

とらしい仕事や人の気に入るような振る舞いだけではない。乃武夫が自分の弱みを握っているのではないかということが、深層にあった原因である。塩沢は「自分のなかに、小さな黒い芽があること」の例として車のスピード違反や、小さなリベートを受け取ったこと、後腐れのない浮気をしたことを挙げているが、それでも塩沢に対する周囲の評価は高いものであった。自分の中の「黒い芽」と周囲の評価との隔たりに嫌悪しながらも「なかに人間なんてこんなものさ、このくらいは誰だってやっているさ、とうそぶく」ことで目をそらした。これが塩沢にある隠れた性質である。そうした自分の裏の面と、世間との評価で苦しむことは人間ならば誰もが抱く悩みである。「このくらいは誰だってやっているさ、とうそぶく」ことは、自分を正当化し、かつ平静を保つための常套手段である。これらは塩沢にとって、まだ許容できる範囲の小さなことであった。しかし、以前会社の会長に電話で鯨岡の悪事や女出入りの讒訴をしたことがあった。

一方的に話し終え、受話器を置いたとき、家の中に
気配を感じた。／乃武夫が台所で水を飲んでいた。／
「入るときは玄関から入れよ」／自分でも声が震えて
いるのが判った。／「みんな、居ないの？」／屈託の

ない乃武夫の声に、ほっとしたのだが、やはり聞いていたのだ。

鯨岡を失脚させた当事者は塩沢であった。誰も家の中にはいないと思つてかけた醜い電話が、ひよつとしたら乃武夫に聞かれていたのかもしれない。乃武夫がいなければ塩沢は、まだ人間なんてこんなものだとさぶくことができたであろう。あるいは完全に聞かれていたとしたら、釘を刺すこともしたかもしれない。ところが自分の汚い部分を乃武夫に聞かれてしまったかもしれないという仮定の状況では不安だけが残り、不安は生殺しのような位置に彼を追い込むのである。

葬壇の前で夜伽をしながら、塩沢は乃武夫をいたぶつた。／中略／あの夜、作り声の讒訴を聞いたかどうか、試すためには乃武夫を怒らせるほか「て」がなかった。／トランプに「ダウト」というゲームがある。

／中略／嘘であれば、「ダウト」をかけた人に有利になり、はずれたら、リスクは大きい。／「大きなことをいえた義理かい、自分はなんだよ」／「いっそはつきり言つてくれたほうが、胸の突つかえがおけるといふものだ。

塩沢は乃武夫を相手にダウトをした。だが乃武夫は尻尾を出さない。言い換えれば、塩沢は自分のしでかしたことの後ろめたさを、乃武夫に解放してもらおうとした。だが乃武夫は怒ることもなく、のらりくらりとかわすだけであつた。自分の一番知られたくないことを知られたとすれば、塩沢は開き直るしかない。だが、開き直りたくても、乃武夫が責めなければ開き直ることは出来ない。体裁を気にする塩沢にとって、世間に知られたくない事実を知られることはもちろん耐え難い。だが、それよりも、「胸の突つかえ」を吐き出したいがために乃武夫に頼つた。そこに父親と塩沢とのつながりが見え始める。

昔父親と一緒に釣りに行つた帰り、父は改札で呼びとめられた。しばらくの間塩沢が一人で待っていると、ようやく駅長室から父親が出てきた。塩沢は子ども心に父親がキセル乗車をしてとがめられたことに気がついており、それを家族には秘密にしなければならぬことも分かつていた。袷の汚れない父親にも、秘密の隠し事があつた。塩沢は口外したことはなかったが塩沢が告げ口をしたかどうかは父親にはわからない。それゆゑ父親は疑い続ける。父は体裁を一番気にしていた。そして、塩沢もまた、父と同じように自分の知られたくない部分を乃武夫に知られたのではないかと、乃武夫を疑い続けるのである。父と同じものを

持っていたことを塩沢に乃武夫は気づかせた。この時、「家族」は舞台としての役割を越えて、個人の性質をあぶり出す装置となる。だが、その個人の性質は脈々と受け継がれてきた個であった。

本当にこの男は、あの声を聞かなかったのだろうか。／それとも聞いていて、聞かぬ振りをしていてくれたのか。／中略／「ダウト」／と何度声をかけても、カードを裏返してくれなければ、計りようがない。／幼ない塩沢の前を、そげたような背をみせて改札口を出て歩いていったあの夜の父の姿がよみがえった。／あの人格者といわれた父にあの夜の汚点があった。そして俺もまた……。／死ぬ間際に父の吐いたはらわたの匂いは、そのまま俺の匂いだ。もしかしたら、生き乍らの腐臭を、この男に嗅がれている。／おぞましさと懐かしさが一緒にきて、塩沢は絶えかけていた香をくべ、新しい線香に火をつけた。

結局のところ、あのときの父と同じように、塩沢は真実を知ることができなかった。知っているのか知らないのかカードを返してくれないからこそ、余計に募る不安が乃武夫を目の仇にする最大の理由であった。それは、あのとき

の父親の姿と重なるのである。そして何よりも、世間で人格者と言われていた父親が隠れて小さな罪を犯していたことを思い出し、自分と父の繋がりの濃さを痛感するのであった。塩沢が「誰でもやっている」と思っていたように、父もまたそのような気持ちでキセルをし、しくじったのだ。死ぬ間際の父の「はらわたの匂い」が耐えがたかったのは、自分の中にある後ろめたさと無意識のうちに重なっていたからである。だが、父と自分に同じ血が流れていることにはつきりと気づかされた今、それを受け容れるほかない。病室では耐えられなかったあの「はらわたの匂い」が「おぞましさと懐かしさ」の両方を与えるのは塩沢と父との繋がりに対する恐れと諦めにも似た覚悟であった。

向田邦子の作品は、小説においても「家族」の物語の域を出なかつたとも評されるが、『思い出ランプ』では「家族」を装置とすることで個人の姿を描き出すことに成功していると思われる。だが一方で、その個人だけが持つ性質なのかといえは、実は遺伝的に、また「家族」としての系譜を受け継いだ性質であることも描かれている。そこには個人がどんなに抗おうとしても避けられないことに対する苦い認識が滲んでいるように思われる。『思い出ランプ』では「家族」に埋没した男女の姿も個人の姿も描か

れた。しかしその個人は「家族」の下に連綿として受け継がれてきた個であり、その個が自分に到ることを知ることとなるのである。

注1 「はめ殺し窓」(向田邦子『思い出トランプ』新潮社平成十七年八月。初出「小説新潮」昭和五十五年二月号)五十六年二月号)。以下本章での本文の引用はすべてこれによる。

- 2 「三枚肉」(注1前掲書)。
- 3 「だらだら坂」(注1前掲書)。
- 4 「マンハッタン」(注1前掲書)。
- 5 「ダウト」(注1前掲書)。
(やまぐち みなみ・実践女子大学博士前期課程一年)